

研 究 報 告

令和 8 年 3 月 30 日

公益財団法人 前田記念工学振興財団

理 事 長 岸 利 治 殿

研究代表者

所 属 : 広島女学院大学人間生活学部

氏 名 : 真木利江

研究課題名 : トウルグ・ジュのブランクーシ記念作品群におけるランドスケープデザイン
の保存管理手法に関する研究

助成金額 : 100 万円

研究実施期間 : 自 令和 7 年 4 月 1 日 ~ 至 令和 8 年 3 月 3 1 日

トゥルグ・ジュのブランクーシ記念作品群における

ランドスケープデザインの保存管理手法に関する研究

Protection and Management Plan of the Monumental Ensemble
and the Path of Heroes, Targu Jiu

広島女学院大学 教授 真木利江

（研究計画ないし研究手法の概略）

2024年に「トゥルグ・ジュのブランクーシ記念作品群」(Brâncuși Monumental Ensemble of Targu Jiu、以下、記念作品群)が世界遺産登録を受けた。戦没者を記念して制作された作品群の登録資産は、東からブランクーシの代表作《無限柱》とコラumpark、1.5kmにわたる英雄通りと教会、《沈黙の円卓》と《接吻の門》のある川沿いの現ブランクーシ公園等10の要素で構成される(図1)。本研究では、1938年の完成当時から大幅に変化した周辺環境を前提とするランドスケープデザインの保存管理の考え方と手法を明らかにすることを目的とする。

ブランクーシ(Constantin Brâncuși, 1876-1957)については、フランスとルーマニア、アメリカを中心に、評伝・作品論・作品集・展覧会カタログや雑誌掲載論文、回想など、膨大な資料と研究の蓄積がある。また、1998年からの修復工事や周辺整備についての報告、世界遺産推薦にあたって市とルーマニア政府により作成された資料等が公開されている。本研究では、これら文献資料のうち主に推薦書(2018年、全140頁)、補足資料(2023年の中間報告に対応して同年提出、全2077頁)の一部、イコモスによる評価結果(2024年、全11頁)の分析と、2025年9月1-3日に実施した現地調査により研究を行った。

（実験調査によって得られた新しい知見）

1. 記念作品群の概要

トゥルグ・ジュ市はブカレストから西に約290km、アパラチア山脈の南に位置するゴルジュ県の県庁所在地で、周辺都市を結ぶ主要道路の結節点にあたる。1916年、トゥルグ・ジュの町を南北に流れるジュ川の東岸がルーマニア兵と市民がドイツ軍と戦う防衛線となった。1935年にアレティア・タタレスクがブランクーシに戦没者記念碑の制作を依頼し、シュテファン・ジョルジュスク＝ゴルジャンらの協力を得て1937年から1938年にかけて作品群が制作される。当初の依頼は《無限柱》のみだったが、記念作品群へ展開し、市で20世紀初頭から検討されていた英雄通りと、2つの公園が一体的に整備された(表1)。

1938年に完成した記念作品群は、1950年代初頭に当時の共産主義政権により批判され《無限柱》の引き倒しが試みられたが、1955年には国の歴史的モニュメントに「造形芸術」分野で登録され、1960年代以降《無限柱》の経年劣化に対し作品制作を技術的側面で支えたゴルジャンが定期的に修復を担当した。1970年代にはチャウシェスク政権下で市の体系化計画が策定され、1980年代にかけて英雄通り周辺でも一部が実施される。

1989年のルーマニア革命後、新しい体制下で取り組みが始まる。1990年にルーマニア政府は世界遺産条約を批准し、記念作品群は1991年に(i)(ii)の基準により暫定リスト入りす

る。翌年には国家重要公益財産に位置づけられ、1994年にこれを保護するための専用のゾーニング計画が策定された。その保護範囲は現在の緩衝地帯とほぼ同じである。1996年にはワールド・モノユメント財団のウォッチ・リストに登録されたことで世界的な関心を集め、ユネスコによる調査団も派遣されている。その後、ルーマニア政府と世界銀行の協定にもとづき、1998年結成のルーマニア政府とワールド・モノユメント財団による国際的な修復チームにより2000年に本格的な修復工事が開始される。《無限柱》の工事は2000年に、2004年にかけて他の彫刻作品と周辺のランドスケープデザインの修復工事が行われた。1990年代にはジウ川の整備と橋の解体・一部移築等も実施されている。

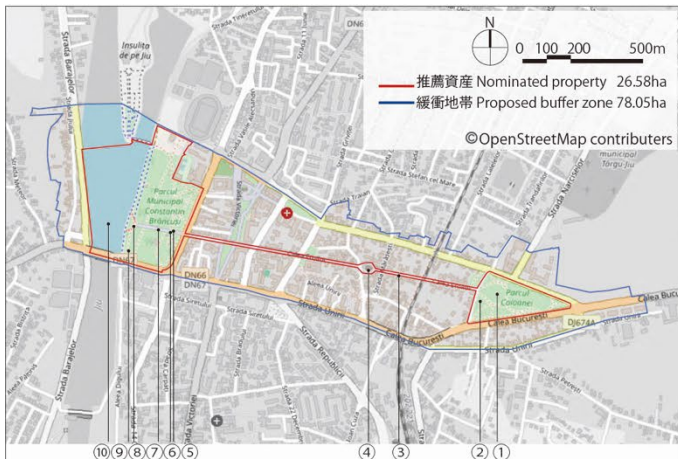
2. 世界遺産登録までの経緯と資産と緩衝地帯の設定

推薦書の提出及び審査・登録はやや複雑な経緯をたどり、一度推薦資産と緩衝地帯の見直しが行われている。まず、推薦書作成にあたって、2013年にイオン・ミンク建築・都市大学による大規模な調査と分析(以下2013歴史調査)、1994年のゾーニングの改定案(同2013ゾーニング)の作成と保存管理計画の策定が行われた。2014年に承認され、同年世界遺産登録の推薦書が提出された。この推薦書は2015年に取り下げられ、2016-17年にイコモスによる助言をうけた後の2018年に改訂版が提出された。2014年の推薦書では推薦資産は、ブランクーシによる作品群のみで、緩衝地帯として英雄通りと作品のある公園およびこれに隣接する1街区のひろがり設定されていた。2018年の推薦書で、ジウ川や英雄通り、教会と2つの公園を含む連続した一帯が資産として設定され、緩衝地帯は1994年以降継続している保護範囲とされた。これにより後の評価では「芸術作品のコレクションではなく、都市的／地域的な広がりを持つ記念碑的アンサンブル」と位置づける点が大幅に改善されたとされる。

推薦書は「近年の紛争の記憶に関連する遺跡」に関して審査する可能性がある推薦資産として審査が延期され、2023年1月に指針が採択された後に、審査が再開された。書類審査を経て2023年7月19-22日に現地調査が行われた。審査の過程で保存管理計画(2019年改訂)および2013歴史調査、2013ゾーニング等の詳細な資料を含む補足資料が提出されている。最終的に、2024年に世界遺産に登録された。

3. 顕著な普遍的価値の評価にみるランドスケープデザイン

推薦書では「登録基準」(i)(ii)(iv)(vi)が提示されたが、イコモスは(i)(ii)のみが該当するとした。(i)については、記念作品群は比類ない「抽象的な記念碑的彫刻、ランドスケープデザイン、工学、都市構成の融合」で、《無限柱》は「20世紀の最も優れた公共彫刻の一つ」とされた。(ii)については推薦書にある高層建築への影響は認められないが「インスタレーション、ランドスケープ、パブリック・アート」等の分野で歴史的に決定的に重要とされ修正が勧告された。(iv)ではモダニズムという時代を代表するとした推薦書に対し、モダニズムは態度として規定されるべきで、かつモダニズムの代表でなく大きく先行するとした。(vi)では、第一次世界大戦後の広範な戦没者記念行為との深い関連が提示されたが、他作品群との類似性より(i)の傑作という側面が強く、国際的には記念された戦い自体の影響は限定的で、直接的に関係する橋や川にはすでに大幅な変更が加えられていることも指摘された。また「近年の紛争の記憶に関連する遺跡」を巡っては、記念碑制作のきっかけになった出来事の記念を超越した作品で、該当しないとされた。戦没者記念の表現という点では、記念作品群が祭壇、門、凱旋道路、記念柱という伝統的なモチーフと一致するが、その独自性と表現の強さは、軍事的・国家的表現を完全に排除し、原初的な形態を通して、戦没者の記念のみでなく、「人間性の根源的な価値が象徴的に表現されている」ことにあるとされた。



- ①《無限柱》(The Endless Column)：真鍮のメッキを施した鉄製モジュール（1.8×0.9×0.45mの15個のモジュールと2個の半モジュール）で構成、総高さ29.35mで背骨として3つの鉄骨で柱が組まれている。建設の詳細が確認可能な写真が現存する。
- ②コラム・パーク (Column Park)：造園家フレデリック・レブン (Friedrich Rebhuhn) 設計、かつて兵舎があった場所でブランクーシ訪問時「干草市場」と呼ばれていた。
- ③英雄通り (Path of Heroes)：長さ1.5km、幅は概ね10m、1937年の都市計画による通り。20世紀初頭から都市計画にあるが、記念作品群の実現にあたり急ぎ承認・整備された。
- ④聖使徒ペテロ・パウロ教会 (Church of the Holy Apostles Peter and Paul)：1747年に旧聖使徒ペテロ・パウロ教会が建設、第一次世界大戦後に英雄顕彰と結びついた。1937年11月の奉献式にブランクーシも参列した。
- ⑤《接吻の門》(The Gate of Kiss)：2本の柱がまぐさを支える。幾何学化され様式化された接吻のモチーフが40組彫られる。全体が厳密なグリッドで構成されている。
- ⑥石のベンチ (Stone Benches)：L字断面で荒い仕上げ、《接吻の門》の両側に設置。
- ⑦スツールの小路 (Alley of the Stools)：《接吻の門》と《沈黙のテーブル》の間の道の両側にある長方形の窪みに3脚ずつ10組。《沈黙のテーブル》の椅子と同じ構造だが正方形断面。
- ⑧《沈黙のテーブル》(Table of Silence)：直径2mの石板に2.15mの石板が重ねられる。円形断面のスツール12脚がテーブルを囲む。
- ⑨ブランクーシ公園 (Constantin Brâncuși Park)：かつては市の公園で、1852-53年に造園された姿が残る。1937年の都市計画の一環でフレデリック・レブンにより設計された。
- ⑩ジュ川 (The Jiu River)：20世紀末のジュ川の水力技術開発で当時から変化し、島と棧橋が新設された。戦間期にあった橋はデイデ&ピレ社により1897年開通したもののだが、1989年に解体され、5つのアーチのうち3つが再利用されている。1920年の記念碑はジュ川西岸に移設されている。

図1：記念作品群の10の構成要素



図2：1923年のトゥル・ジュと世界遺産の資産および緩衝地帯

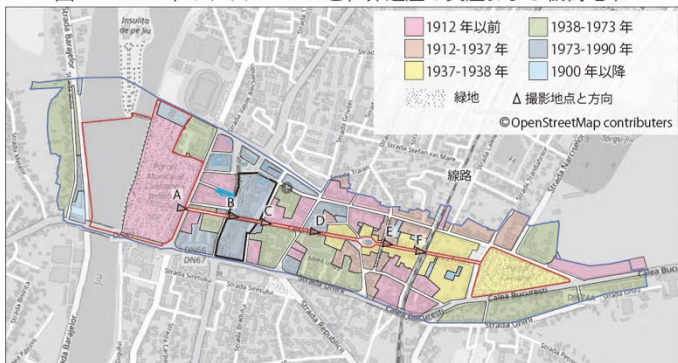


図3：資産の構成要素と区画の変遷



図4：現在の英雄通り沿い（図3の撮影地点A-Fから東を臨む）

図版出典：図1・3：OpenStreetMap（2025年3月26日）より転載、トリミング等の上、加筆

図2：www.geo-spatial.org（2026年2月24日）より転載、トリミングの上、加筆／図4：2025年9月筆者撮／表1：筆者作成

表1：完成までの経緯と完成後の経緯

年	月	
1747	-	旧聖使徒ペテロ・パウロ教会建設
1853	-	市の公園（現ブランクーシ公園）の造園が実施される（1852-53）
1896	-	デイデ&ピレ社 (Dayde & Pille) によりジュ川に橋が完成（1894-96） 1897年開通
1916	10	ジュ川の橋で街を守るためルーマニア兵と市民がドイツ兵と戦う
1920	10	英雄を称えるため、橋の上に大砲2基と碑文が設置される
1921	-	アレティア・タタレスク (Arethia Tătărăscu、後のルーマニア首相ゲオルゲ・タタレスクの妻) によりルーマニア婦人連盟ゴルジュ支部 (NWLG) が設立 聖使徒ペテロ・パウロ教会の新しい鐘が発注される
1927	-	聖使徒ペテロ・パウロ教会、再建開始（設計者が複数回変更になる）
1932	-	NWLGがトゥルグ・ジュの犠牲を記念するモニュメント実現のための委員会を設立
1933	8	トゥルグ・ジュ市が「第一級戦功勲章」を授与される
1935	-	ルーマニア婦人連盟ゴルジュ支部会長アレティア・タタラスクがブランクーシと接触／ブランクーシの元弟子で友人の彫刻家のミリツァ・ペトラシュク (Miliza Petrașcu) が仲介 ブランクーシとシュテファン・ジョルジュスク＝ゴルジャン（旧友の息子にあたるエンジニアȘtefan Georgescu-Gorjan）はパリで《無限柱》について検討（1936年、1937年にもパリで検討）
1937	4	市議会が記念作品群の設置と英雄通りに関する都市計画を承認
	6	ブランクーシがトゥルグ・ジュを訪னி《無限柱》の設置場所を決定
	9	ブランクーシがモジュールの彫刻を制作
	9	並行してペトロシャニの工房では、《無限柱》の構造体となる3つのセクションが制作される
	9	「英雄通り」と命名
秋		造園家フレデリック・レブン (Friedrich Rebhuhn) が川沿いの公園を設計
	10	ペトロシャニの工房で《無限柱》モジュールが制作完了
	10	ブランクーシがトゥルグ・ジュに到着
	-	《接吻の門》を制作、公園入口から西に設置場所を少し移動
	11	《無限柱》組立完了
	11	聖使徒ペテロ・パウロ教会 献堂式ブランクーシ参列
	11	造園家フレデリック・レブン設計でコラム・パーク竣工
	-	最初の《沈黙のテーブル》が椅子のない状態に設置されるが、市がブランクーシの名と碑文を刻んだため、翌年に新しい石を発注
1938	7	現地で《無限柱》に金属被覆、足場解体
	9	インドから帰国したブランクーシが《接吻の門》の装飾を彫刻、彫刻後に石のベンチの設置を決定
	10	《無限柱》の奉献式
	-	英雄通り開通
1950's		初頭 柱撤去工事（失敗）
1955		《無限柱》ルーマニア歴史のモニュメント第1リストに登録 国連とユネスコに加盟
1965		チャウシェスク政権（1989まで） 《無限柱》モジュールの修復
1965-66		《接吻の門》修復
1974		「体系化」の一環として市中心部の開発計画が策定される
1975-76		ブランクーシ生誕100年を記念して、金属被覆
1977-85		街の中心部で「体系化」が実施され、英雄通りを南北に横断する歩行者専用通路（現公共緑地）が設置される
1983-84		《無限柱》の技術的評価を実施 (INCERC)
1989		ルーマニア革命
1990		ラドゥ・ヴァリアが「コンスタンティン・ブランクーシ国際財団 (CBIF)」設立 ルーマニア政府、世界遺産条約を批准
1991		記念作品群がルーマニア暫定リスト（登録番号584）に、基準(i)および(ii)に基づき登録
1992		国家重要公益財産指定、専用ゾーニング計画の設定が規定される
1994		「英雄の道」保護区域のゾーニング計画が策定、CBIFと地方自治体との間で協力協定が締結される
1995		市の都市ゾーニング計画策定
1996		保存状態と柱（支柱と基礎部分）の構造的健全性の調査 世界記念物監視リストに登録（CBIFの活動による）
1996-97		ジュ川の水力発電開発・河床の整備と貯水池・島の建設、旧ジウ橋の解体と一部移築
2000-04		ルーマニア政府と世界銀行の協力により記念作品群の修復等が開始される。2000年に《無限柱》修復、200-2004年に他の要素の修復 2002-2004年にコラム・パークとブランクーシ公園の改修
2013		記念作品群保護区域（登録資産と緩衝地帯）のゾーニング計画更新、保存・管理計画策定、2014年に市により承認
2014		アンサンブル構成要素を世界遺産に推薦（2015撤回）
2018		推薦書提出（「近年の紛争の記憶に関連する遺跡」に関わる可能性がある推薦資産として審査延期）
2023		「近年の紛争の記憶に関連する遺跡」に関する指針採択、審査開始
2024		世界遺産登録

ランドスケープデザインについては、「登録基準」(i)(ii)でともに高い評価を受けている。具体的な記述としては、単に「モニュメントを都市の中に配置するのではなく、なく「モニュメントの中心部に機能的な要素として都市を配置した」とされ、公園と英雄通り沿いの街の水平性に対する《無限柱》の垂直性という対照と、動的なシークエンスにも触れられている。

4. 作品群完成後の周辺環境の変化と理解

記念作品群の制作前の街と登録資産の関係を図2に示す。推薦書自体には、環境の変化に対する理解やそれに対する対応方針について歴史的調査の結果や用途地域等の都市計画図を用いた説明はなく、具体的な記述自体も限定的だが、基本的に、彫刻作品自体とその周辺については完全性が保たれている一方で、英雄通り沿いは課題が多いとされる。

完成後の具体的な環境の変化を、2013 歴史調査に含まれる緩衝地帯内の区画の形成過程図をもとに図3に簡略化して示す。また、図4に現在の英雄通り沿いの写真を示す。現在の緩衝地帯はもともと、ジュ川と東岸の整形庭園、その東に中心市街地の建築群、教会周辺から住宅地と耕作地が混じり合い密度が下がっていく一帯だった。記念作品群の制作を機として英雄通りが開通し、図3に薄赤と薄橙で示した以前からの区画に、薄黄で示した区画が新しく形成された。薄緑の範囲はその後1970年代までに発展が見られた区画で、薄青が1973年以降の区画となっている。そのなかでも中央の太枠で囲った一帯が、1977～1985年に体系化計画による大規模な解体と開発が行われた区画で、推薦書でも、伝統的な都市構造の一部が破壊され美観が損なわれたと明記されている。この区画は図2の薄青のハッチ部にあたり、現在は図4の写真Bが示す通り、形態操作が行われた大きなヴォリュームの集合住宅が緑地に面して連続している。

こうした評価の一方で、ブランクーシが記念作品群を都市と統合された作品として制作し、周辺建物を当時のまま保存をすることを意図していなかったこと、共産主義時代の都市開発も現在では「都市史の一部」として捉えることの重要性も指摘されている。また今後については英雄通り自体が「町の象徴でありかつ観光を含む経済的発展の骨格をなす軸」となるようゾーニングが策定され、既に一部では建物の外観の改善、舗装・照明・緑地の統一、駐車場の撤去等のプロジェクトが計画・実施されていることが報告されている。評価結果は基本的に、推薦書で示された内容の確認となっているが、末尾の「追加的勧告」で記念作品群の制作時には既に存在していた線路の埋設または迂回についての検討が勧告されている。作品完成当時の維持保全でなく、顕著な普遍的価値をより高めることが重視されている。

謝辞：現地調査において、記念作品群の世界遺産登録に長く携わってきたトゥルグ・ジュ市副市長のエイドリアン・チューダー(Adrian Tudor)氏とスタッフの皆様から資料・情報の提供および調査のサポートを、ルーマニア文科省世界遺産担当のアレクサンドル・メキシ(Alexandru Mexi)博士から専門的知識の供与を受けました。記して謝意を表します。

(発 表 論 文)

真木利江：トゥルグ・ジュのブランクーシ記念作品群におけるランドスケープデザインの保存管理手法に関する研究(1)、日本建築学会大会学術講演梗概集(九州)、pp.635-636、2025年9月

真木利江：トゥルグ・ジュのブランクーシ記念作品群におけるランドスケープデザインの保存管理手法に関する研究(2)、日本建築学会大会学術講演梗概集(中国)、掲載頁未定、2026年9月(投稿済)